

# 山と博物館

第20巻

第7号

1975年7月25日

大町山岳博物館



若一王子神社祭礼での「大町流籠馬太鼓」の演奏

撮影 丸山 隆士

## 「大町流籠馬太鼓」のこと

恒例の大町の夏祭り、若一王子神社の祭礼が、去る7月16日・17日と行われた。

今年は、稚児行列や山車、流籠馬の通る市内の通路は、時間規制で車はシャット・アウトされ、歩行者天国となった。今まで車で遠慮して通路の片側を肩身の狭い思いをして練っていた山車も、今年は何かゆつたりと、年に一度の祭りを楽しむかのように練っていた。可愛い稚児の行列に、又、少年騎士の乗った流籠馬に、観光客や山帰りの若者がみとれていた。

この若一王子神社の祭礼に花を添えたのは時ならぬ太鼓の音であった。

大太鼓がとどろくがごとく、また、ある時は流れるごとく、高く、低く、その音は、神社の大杉の中を流れていた。

「大町流籠馬太鼓」発起人会(51年3月より保存会に改組される)の面々が打ちならす10台の太鼓の音に観光客はもとより、地元の人々も思わず耳を傾けていた。

49年6月に発起人会の発足、10月基礎練習開始、11月太鼓購入、50年1月には若一王子神社で奉納演奏と、計画は急ピッチで進んでいる。

演奏者個々が王子神社の祭礼に焦点を合せ、練習にはげんだことは、当日のパチさばきからみても想像にかたくない。

流籠馬太鼓の発足に際し、——夏祭りの盛り上りの中で、伝統行事「流籠馬神事」を更に後世に永く伝えるにふさわしく、また、それが地域の発展に寄与できるものであると思う——と述べられているように、今まで種々企画実施された新行事の中では、久々の大ヒットではないかと思う。

伝統の神事の中にスポリリと溶けこんでいたのはみごとである。

発足間もないので演奏曲目も限られたものようではあるが、演奏曲目の作曲・演奏者の養成など大変よく的であるので楽しみにある。「大町流籠馬太鼓」の面々の今後の精進と発展を祈るものである。(グチ猿)

# 高山の鳥

## —山を訪れる人のために—

### 長 沢 修 介

私達が山に登る時は、険しい山道をただひたすらに喘ぎ登って、山頂に着いた時の、美しい花々の姿や、雄大な風景に感動する一瞬のために、黙々と、ただひたすらに、先行の人の足踏のみをみて登るだろうか？

山に登って、咲き競う高山植物の美しさに魅せられ、花の名前を覚える人、雄大な風景を絵に描き、写真に写して山を覚える人、皆それなりに味う目的がある。しかし、喘ぎながら登る道すがら鳴いていた小鳥や、休んだ山頂附近にひっそりと生活する小鳥達に目を向ける人は少ない。花のように美しさを目前で競い、蝶のようにその華麗な姿を誇示するように、人の前を飛ばないためだ。

一口に高山の鳥といっても、北アルプスのような登山道の発達している所であつても、乗物から下りて歩き始める標高は八〇〇㍎から高く一〇〇㍎附近であるから低山帯の森林に住む鳥から、亜高山帯に生活するもの、そして高山に住むもの、又エサを求めて平地から登って来るものがあり、それ等すべての鳥の生活を理解できて本当の意味の高山の鳥を知り得たことになるのである。

夏の北アルプスを登山する際も、ただあえぎ、急坂をひたすら前の人の後をくつついて登るのでなく、周囲の状況や、自然環境に目を向けて登ると、登る苦しさもまぎれ、より一層自然を理解し、登山をより楽しいものにしてくれるはずである。

以上のような意味を含め北アルプスを登山して見られる代表的な鳥について記してみた。

#### 亜高山帯

標高一五〇〇㍎—二五〇〇㍎で発達している森林はシラベ・コメツガ・トウヒ・オオ

シラビソ・ネズコ・ウラジロモミ・カラマツなどの針葉樹を尾根筋に主とし、ブナ・ダケカンバ・サワグルミ・ミネカエデ・ウラジロナナカマドなどをまじえた原生林で、標高一八〇〇㍎位のその下部で斜面が急な所で雪崩や山崩の起りやすい沢筋や不安定な所は落葉広葉樹林が多い。

これ等の林相で標高の低い方では、オオルリ・キビタキ・ヤマガラ・マミジロ・アカハラ・トラツグミ・コルリ・ヤブサメ・カケスなどの低山帯の鳥もすみ、代表的なものとしては、コマドリ・メボソムシクイ・エゾムシクイ・ルリビタキ・ミンサザイがあり、下草にササの繁るところでは、ウグイスの声も多い。又標高の高い所では、ウソ・キクイタダキ・カヤクグリ・ホシガラス・ビンズイが繁殖をし、この地帯に周年生活する留鳥としては、キバシリ・ゴジウカラ・シジュウカラ・ヒガラ・コガラ・アカゲラ・オオアカゲラ・アオゲラも繁殖をする。

#### 高山帯

標高二五〇㍎以上の地帯でダケカンバ・カラマツ・オオシラビソ・トウヒなどの高木が高木として成長せず、丈が低く、ハイマツ・ナナカマド・ハクサンシヤクナゲなどと一つしよに繁つた地帯である。春、雪原となつて雪の残る所は湿性のお花畑となり、シナノキ・ンバイ・ミヤマキンボウゲ・クルマユリ・チングルマ・ミヤマシオガマ・ハクサンイチゲ・クロユリ・ホンバトリカブト等の花々が咲き競い花の楽園を作っている。

さらに高度を増すと、はげしい風雪のためハイマツは低く地に這つて、白骨のように白と幹を見せ、岩石の積み重ねとなつて頂上

に至るのである。植物も乾燥性のトウヤクリ・ンドウ・コマクサ・オヤマノエンドウ・イワギキョウ・ミヤマオダマキと小型のものになる。

ハイマツ帯やミヤマナナカマドの低木帯には、ルリビタキ・メボソムシクイ・カヤクグリが圧倒的に多く、営巣も多い。ミンサザイやウソも賑り、ホトトギス・ツツドリ・ヂュウイチの声も時としては飛来してきかれる。草地にはビンズイが営巣し、お花畑や岩礫地には周年ライチョウが生活し、ハイマツをねぐらとして生活している。岩礫地にはイワヒバリが営巣し、時に山頂附近の登山者のおこぼれを頂戴しに、目前まで姿を見せる。尾根の側壁の岩壁にはイワツバメ、アマツバメが集団営巣し、尾根を越える時にビューとジェット機のような羽音を立てて飛交う。

以下代表的な鳥を紹介しよう。

#### ★オオルリ

ヒタキ科

一度嘔始めたら、ピービル、ピービル、ピス、ピス、ビルビル、ポビリー、ビリー、ピス、ピス、ビリー、ピスピス、ギ、ギギと消々、郎々と川の瀬音にもまげず大声で嘔る。嘔る枝は大体決つてることが多い。日本の山林の代表的な歌手の一つであり、雄の体色の瑠璃色と共に、一番の美声である。亜



育雛中のイワヒバリ 翁ガ岳

高山帯の下部以下の森林や低山帯の落葉広葉樹林帯に生息し、崖や土手に多量の鮮類を集めて営巣する関係上、主として渓谷にのぞんだ林に多く、登山の途中では渓谷ぞいの道や雪渓に入つて川の瀬音が聞えなくなると、この鳥の賑りが聞えることが多い。

黒部下廊下、白馬尻、針ノ木雪渓下部でも沢山の賑りを聞く。

雄は頭、背が鮮やかなコバルト色、のど、胸が黒色、腹が白色と目立つ色彩を持つが、雌は目立たない褐色が主体の体色である。

#### ★マミジロ

ツグミ科

キヨロン・ツリ、チヨロイ・ツリ、と一声二声澄んだ声で嘔る。落葉広葉樹林、亜高山帯の針葉樹林に多く、標高七〇〇㍎—一五〇〇㍎附近が最も多く生息する。林の中の地上を両脚で跳ね歩きつつ餌をあさる。早朝や夕暮時稍近くにとまり一きわ高い声でゆっくりしたテンポで一声、二声と嘔る。白馬猿倉附近、扇沢周辺、鹿島岳出合附近では良くこの声を聞く。雄は全体黒色の体色をしており、純白色の美しい眉斑が目立つのでこの名がある。

#### ★コルリ

ツグミ科

尾根道などの急な登りで、何処も、何も見えず、ただひたすら登り続けるといったような山道でよくこの鳥の声を聞く。コマドリと似た、チールル、チールル、チールルと鳴くのと、チャリル、チャリル、チャリルと鳴く二つの鳴き方があるが、いずれも良く近くで聞くとチツ、チツ、チツチツという金属性の前奏曲を入れるのですぐ区別できる。低木の繁や叢の中をくぐりながら鳴く、至る所でこの賑りを聞く。

雄は春が暗藍青色、のど、腹が白色でオオルリの前面黒色と異なる。

先日、学校の先生の登山の講習会でこの鳥の鳴き声を、ヒ、ヒ、又はチリ、チリ、チリ、チリ、チヤリ、チヤリと教え、鳴き声を实地に聞かせ帰つて来て、コルリは何と鳴くか

覚えたかと聞いたら、チン、チン、チャラ、チャラと完全に覚えまして、という答えであった。

★メボソムシクイ

ウグイス科

低山帯から亜高山帯に入るとブナ、ミズナラの大木も見られなくなり、雪崩る所や山崩のする所又は沢筋にはダケカンバや、ヒロハカツラなどの木が出現してくる。この辺りに来ると必ずこの鳥のチヨリ、チヨリ、チヨリ、チヨリという四拍子を聞く。この鳥はダケカンバがそろそろ出始めるなあ、と思う頃から嘔りを聞く。標高一五〇〇以上の亜高山帯を示す境界標鳥である。

登山道が今のように発達しない昔は、里から歩いて大体この鳥の聞える頃の所まで来ると、山小屋があり、そこに一泊するまで大層お金を取られた。しかし泊らぬわけにはゆかないのでどうしても泊るようになる。そこがこの鳥のチヨリ、チヨリという鳴き声をもちつて、ゼニ、ゼニと聞えるようになり、ついにゼニトリドリという悪名がついてしまった。全体にオリーブ緑色の体色で黄白色の過眼線が良く目立ち、敏捷に枝から枝へ渡って鳴き歩く。

★コマドリ

ツグミ科

名前は知っていても嘔りを知らない人の方が多いのはこの鳥である。

深山溪谷の名にふさわしい鳥であって、上高地にも多く、槍沢、針ノ木雪渓、白馬大雪渓、湖沢、剣沢、等高山の雪渓近くの低木にも多い。倒木の上や、朽木の頂で胸を張って、尾を高々と立てて、チン、カラララ……と上体を振りながら鳴く姿勢が、若駒のいななきに似ているところからこの名前が出たという。一谷に一番とすることを昔からよく言われるが、そうではないにしろ自分の領域は厳として守る鳥であって、自分の領域へ他のコマドリが入ると烈しい斗争を始める。又毎年同じ土地に生息するので嘔る所は毎年ほぼ一定している。

★ミソサザイ

ミソサザイ科

全体として赤褐色の非常に小型の鳥であって、あの小さな体からよくもあんな大声の美声が出ると感心する。

きわめて動作は敏捷で、こちらの土手に入ったと思うと、向うの木根から顔を出すといったようにたえず動き廻り、溪流の石の上や流れにのぞんだ梢などで、胸を張り、尾をピントと上げ、くちばしを空に向け、チチ、チチ、チチチヨロ、チチチヨロ、チチチヨロロ口……と長く力一っぱい鳴く。冬のヤブからヤブへ、チャ、チャの潜るミソサザイの姿からはとても想像すらできない姿である。

★ウン

アトリ科

赤彦の歌に「高山の木がくりにして鳴くウソの声の短かきを心寂しむ」という歌があるが、この歌はヒーウ、ヒーウと口笛のように物悲しく、淋しく鳴くウソの生態を良く表現した歌である。性質は非常に穏和で、夏は番



ホシガラス 撮影 齊藤 忠彦

でひっそりと生活している。たまに登山道などで出合っても、あわたたしく逃るでもなくヒウ、ヒウを短く鳴き、木の若芽などをついばんでいる。古から飼育鳥としても知られているが、ある人の随想に、都会の雑踏の中で小鳥屋の店先にこの鳥の声を聞き、ふと深山の針葉樹の中で霧の小径を思い出し、ウンはやはり深山にあるべき鳥だという記事があったが真にそうあるべきと感じた。

★カヤクグリ

イワヒバリ科

チーチーチチリ、チリリ、と金属性の鈴を振るような鳴き声をして、姿をあまり見せず飛び廻るこの鳥は、亜高山帯の森林限界を思い出させる鳥である。ハイマツの大きな叢の中などに巣作り、頭は淡いチヨコレート色、春は赤褐色で、遠目にはミソサザイをいまわり大きくしたような感じに見える。

★ホシガラス

カラス科

別名をダケガラスとも呼ばれ、ダケガラスは岳鴉、ホシガラスは体色の濃いチヨコレート色に白い雨滴形の斑点のある星に見て、星鴉と名付けたらしい。シラベ、オオシラビソ、トウヒ、ハイマツなどの榎果を好んで食べ、又食べる場所を定め、そこまでくわえて行って食るのでこのような場所には沢山榎果が堆積している。盛夏の登山道などではよく見かけることがある。ガアー、ガアー、と鳴くが、バリエーションを登って、霧にまかれた時に聞くこの声はあまり気持ちの良いものではない。

★イワヒバリ

イワヒバリ科

高山の岩礫地に生活の本拠を持つこの鳥も近年夏山以外に、五月の連休頃でも白馬の頂上のような人の沢山休憩する場所では、手の届く位の所まで寄って来て、パンくずなどの残飯をあさっている。夏山では北アルプスの山頂という所では、ほとんどこの姿を見かけ、特に累々と岩の積み重なった所に多く、人を恐れず近寄り、黒曜石のような目をくりくりさせて見つめている。

キヨロリ、キヨロリ、キヨロリ、キヨロリ、キヨロリ、と区切つてはりのある声で嘔る。盛夏を過ぎる頃は少群で、残雪地などで餌をあさるのを見かける。

★アマツバメ

アマツバメ科

高山の岩壁や、山地の断崖、島の絶壁等に集団で営巣し、ジェット機が飛ぶようにヒューという羽音を立てて尾根越えする時などはその下にいれば思わず首をすくめる有様だ。北アルプスなどの非対象山稜など、信州側からガスが上る時、上昇気流に乗って上る虫を求めて沢山飛来し、大きな鎌のような翼を広げ、超特急で自由自在に上空を飛ぶ姿は見事である。これより少し大きいハリオアマツバメは尾がぶつ切つたような角尾である点が区別点である。

★イヌワシ

ワシタカ科

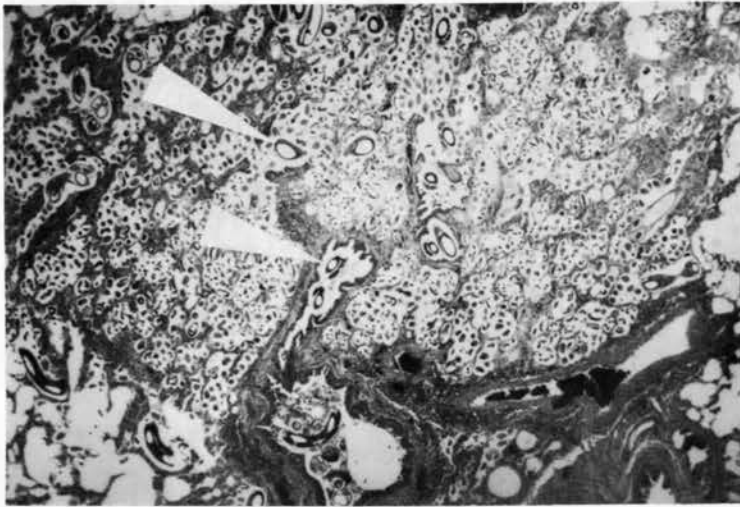
本州中部の山岳地帯の鳥の王者である。登山者がこの鳥を見る機会は少なく、二五〇〇以上の山頂や稜線で、この鳥が飛ぶのを見ても、それがイヌワシと気付く人は少ないと思う。上空の一点の点として悠悠として羽ばたき一つせず弧を描く姿は、正に空の王者の姿である。たま〜空高く飛ぶを見ても一瞬の時であって、まして獲物を捕える瞬時など見るにもおよぶことが出来得ないだろう。ただ、まれに、上空に舞い上り始める時など、両翼の目点が変わらずか印象にのこるのみである。あれがイヌワシの飛んでいる姿だと上空を指さされて始めてその飛ぶ鳥影を見る人の方が多い。何故なら、高い所に登った人間はより上空には何も無い、何も無いと思つて常に自分下を見ている悪いせいがあるから。以上代表的な鳥について簡記したが、本当に高山のみに生活するライチョウについては博物館の立派な報告書もあり、その姿や生活は紹介が多いので今度は割合した。

(大町郵便局・山博調査員)

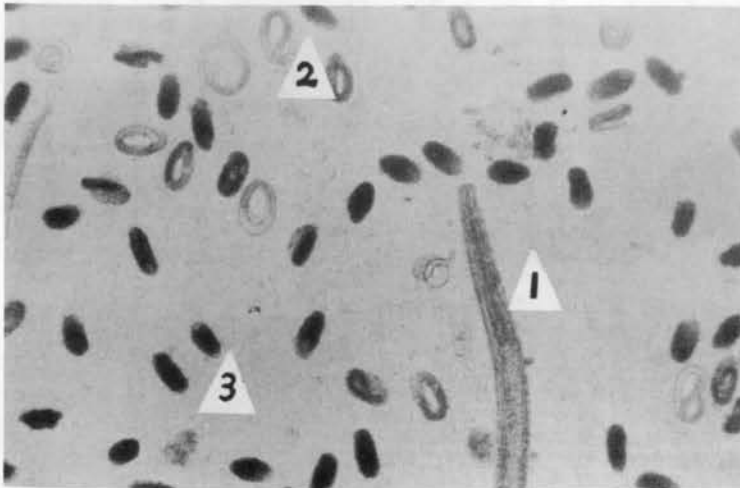


# ニホンカモシカと肺虫

塩沢道雄



気管支および肺胞内に多数の肺虫の成虫(矢印)子虫、虫卵がみられる



カモシカの肺から分離された肺虫、1、肺虫の成虫頭部2、肺虫の子虫3、肺虫の虫卵

ニホンカモシカの肺虫、聞きなれない言葉であり、また、今まで誰も目にしたものはいなかった。  
カモシカから肺虫が、はじめて見つかったのは、昭和48年2月であった。  
長野県大町市高瀬入の不動沢で、17、18才くらいのおスのカモシカが保護され、ただちに大町山岳博物館に收容されたが、收容2日

後の2月23日に死亡してしまつた。  
山岳博物館からの連絡で早速松本家畜保健衛生所で病性鑑定を實施した。  
この間、諸手続のため遅れ、私が実際にカモシカを見たのは2月24日であつた。  
解剖したところ、左右の肺横隔葉の先端部が表面白桃色で、断面では肋面から横隔面におよび灰白色の不整形無氣肺がみられ、さら

にその付近の包膜直下にも同様の限局病巣が観察された。  
病変部は硬く肉様化し、肺のその他の部分は、退縮不全で充血していた。  
ひき続き、この病変部を病理組織学的に検査したところ、間質に著しい線維化と平滑筋組織の肥大があり、気管支および肺胞内に多数の肺虫が発見された。  
病変部にはさらに血管および気管支周囲のリンパ様細胞の集積や肺胞性気腫などが認められた。——肺虫はこのようにして発見された。その時観察された病変は以上のものであつた。  
昭和48年にはこの1頭に肺虫をみただけであつたが、昭和49年には1月以降4月までの間に大町では13頭のカモシカが保護された後に死亡、その他の郡市でも4頭が発見死亡しており、そのいずれの個体も病理学的に検査した結果、そのすべてに肺虫の寄生が観察された。  
私はこれら18頭のニホンカモシカの寄生性肺炎に対し、その病理学的所見を「肺の間質の線維化と平滑筋組織の肥大、血管および気管支周囲におけるリンパ球浸潤を伴つた亜急性ないし慢性の気管支肺炎」と結論づけた。  
同定は2頭について分離した肺虫を農林省家畜衛生試験場

上野計先生に依頼。北海道大学大林正士先生との間で行われた。  
結果は雄の体長24.3-28.4mm、最大幅0.084-0.104mmで *Protostrongylus* 属に属する新種であるとの連絡を受け、その後この肺虫は、*Protostrongylus shiozawai* と命名した。  
この肺虫のカモシカに対する病原性はわからない。しかし、多くの文献からの想像では肺虫の寄生は細菌の二次感染を招来しやすいことはいえる。  
アメリカのロッキーマウンテンに生息するロッキーマウンテン・ゴートにニホンカモシカに見られたと似た肺虫の寄生があるが、ロッキーマウンテン・ゴートの肺虫寄生例からは、細菌が分離されている。  
肺虫の寄生の有無は糞中の子虫を検出することによって容易にわかる。  
今日までに野外糞10例余りを検査したが、高率に子虫が検出された。  
これはあくまで推測であるが、長野県内に生息するカモシカに留まらず、日本中の多くのカモシカが肺虫感染を受けている恐れがあり、肺虫がカモシカに与える影響など、さらに詳しく調査研究を続けてゆく必要があると思ふ。  
(長野県畜産試験場)

## 博物館だより

### カモシカ扇沢放養園へ

去る6月16日、本館で飼育中のカモシカ、沢子、山の2頭が扇沢放養園へ移された。  
雪の来る11月初旬まで、標高約一五〇〇メートルのこの地で飼育展示される予定。

### 山と博物館第20巻第7号

一九七五年 七月二十五日発行  
発行所 長野県大町市アエル②〇二一  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市下仲町  
大系タイムス印刷部  
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)三三、二九三